

敦煌の歴史的背景

— 敦煌といふ —

今ではトンコーといえば誰でも知つており、美しい石窟壁画やシルクロードを行く駱駝の姿を憶い浮かべるであろう。かようにトンコーが広く知られたのは、井上靖氏の名作小説『敦煌』（一九五九）以来のことである。その前は、松岡譲氏の『敦煌物語』（一九三八）等を通じ一部の読書家、仏教美術・シナ学・内陸アジア史に関心をもつ若干の人々を除いては、その名を識る者もなかつた。

敦煌の地名は、中国の前漢武帝の時代に河西諸郡の西

端に敦煌郡が設置されて以来二千有余年、今日の中華人民共和国甘肃省酒泉地区敦煌県にまで受継がれている。

英文では Tunhuang。中国の標準ローマ字表記では Dun-huang と記され、七～十世紀の前後には火を付けて熐煌と書かれた。その位置は、現在の敦煌県城が東經九四度四八分、北緯四〇度一〇分、県城東南約二〇キロにある莫高窟はほぼ東經九五度、北緯四〇度に当り、緯度は日本の盛岡や秋田に近い。海拔千五百メートル以上の高原なので、空気は稀薄で紫外線が強い。そして何よりこの地を特徴づけているのは、土漠地帯に点在するオアシスであること、同時に異常な乾燥地域に属す点である。砂漠とい

池 田 溫

うより土漠・礫漠の語がピツタリする中国西辺内陸アジアの一角に立つと、温潤なモンスーン圏に生活するわれ日本人とは、全く異質な世界なのだと実感させられる。雨は殆ど降らず年雨量十ミリ、降雨二、三回のことが多く、蒸発量が降水の三〇倍以上、内陸性気候で夏は熱く冬は零下二〇度にも降り、砂塵をまき上げる西からの烈風が吹き荒れる日が多い。

一九八〇年、秋山光和先生を団長とするグループに参加させていただいた筆者が敦煌を五日間訪れたのは九月の好季であった。生まれて始めて眞の乾燥地帯を体験した筆者は、何となく鼻腔の異常を感じながら二、三日その理由に気付かなかつたが、やがて極端な乾燥による粘膜の反応とわかり、うつすら鼻内に滲み出た血液にも驚かなくなつた。朝限られた薬籠の水をコップに注いで口をゆすぎ、それを大地にこぼすと、ジューッと音をたてて乾ききった粉土が固まつて褐色に色つく。しかし何分もすると又蒸発して跡かたもなくつてしまふ。毎朝戸外で口をすすぐたびに、水を吸い込む乾土の微妙なひびきが大地の蘇生の声のように思われたものである。

設中ときく。筆者らの参観した八〇年には宿泊設備として県招待所しかなく、酒泉飛行場から五時間以上バスにゆられ、安西に一泊してから二時間余バスでやつと千仏洞に到着したのを思うと感無量である。中国の飛躍的現代化の波の中で、敦煌も急速に近代都市に相貌を改めてゆくであろう。

二 諸族雜居の地

遊牧民月氏の天地であった甘肅の黄河以西の回廊地帯に北方から匈奴の勢力が加わり、それに対抗して武帝の積極政策により驃騎將軍霍去病が漢の大軍を率いて出撃し、匈奴の昆邪王を破つて月氏の故地を始めて漢の勢力下に収めたのは、元狩二年（前一二一）のこととされ、やがてこの地方に河西・酒泉郡が置かれ、漢の西域進出への基地とされた。酒泉郡の管下にあつた敦煌は、將軍李廣利の大宛（フェルガナ）遠征（前一〇四—一〇一）の際兵站基地となり、第一回目に數万人、第二回目には吏将兵卒六万人とこれに私従する人々、又牛十万頭・馬三万匹・驃騎駕駒数万匹及び莫大な兵糧武器が集められ、

このような想像を絶するきびしい自然と闘つて豊かなオアシスを築き上げて来たのが、敦煌の住民であった。南方にそびえる五千尋をこえる祁連山脈から流れ出す内陸の尻無川党河（唐代には甘泉水とよばれた）などから水渠を引き、或いは井水を汲上げて灌漑に努め耕地を造成する。漢代に華北平原東部から辺境防衛の兵卒に徵発され、或いは流亡の飢民や流刑の犯罪者等々として、はるばる千数百キロ以上も遠くこの地にやつてきた人々の、屯田はじめまる敦煌の開発史は、当然無名の大衆の血と汗の結晶である。小麦をはじめトウモロコシ・キビ・アワ・綿花・ゴマ・瓜類などの畠がひらけ、河西では肥沃をもつてきこえるこのオアシスも、文明の中心からは遙かに距たる内陸アジアの土漠（ゴビタン）中の一オアシスに変りはない。

一番近い鉄道駅の柳園へも直線距離一三〇キロ以上距たつており、酒泉から安西を通る自動車道路が最要の交通路となつてゐる。この辺地の小都市にも、世界に名だたる莫高窟のおかげで近数年来海外からも観光客が蝶集するようになり、県城にホテルも出来、更に飛行場を建

敦煌から出発した。かくて辺防と西域進出における敦煌の重要性が顯著となり、ついで金頭の屯田、そこへ至る交通路の確保、更に漢の大規模な使節団の頻繁な派遣とそれに対応する西域諸国からの使節団の來訪が伴ない、玉門関・陽關の両関門を扼す敦煌の地の辺疆の要衝としての役割はますますたかまつた。かくて酒泉郡から分れて独立の敦煌郡が設置されたのである。⁽¹⁾

漢代に六県を管轄した敦煌郡の地は、唐代には大体沙州（敦煌郡）瓜州（晋昌郡）の両州に当り、今日では敦煌・安西二県の範囲にほぼ重なつてゐる。漢代は全国に約百郡、唐代は約三百州、そして今日は全国で二千二、三百県と二百市を擁しているのを通観するなら、巨視的にみた敦煌の比重が漢で最も大きく、唐でやや減じ、現代は著しく軽微となつてゐることが明らかである。戸口数についてみると、前漢末に戸一万二〇〇、口三万八三三五と伝わり⁽²⁾、唐の天宝時代に敦煌・晋昌両郡合して戸七五六二、口三万六〇九八と算えられ、現代は敦煌県人口約九万と⁽⁴⁾いうから、古代に比し今日人口は三倍以上に増加している。しかし全国平均に比べれば人口密度はかな

り稀薄であり、僻地たるを免れていない。

敦煌郡設置以後二千余年の歴史を通じ、この地の住民の主体が漢族であった点は疑いない。しかし同時に漢族以外の少数民族の混住するものも相当の割合に達した点も看過してはならず、かかる住民構成の多様性こそ敦煌の重要な特色といわねばならない。既に古く六朝前期の『耆旧記』(『続漢書』郡国志劉昭注所引)に、敦煌は「華戎交わる所の一都会(漢人と異民族のあつまりすむ町)なり」と特筆され、莫高窟の歴代壁画にもアリアン・チベット・トルコ系等諸外族とみなされる者が描かれていることは周知の通りである。

長い歴史を通じこの地を支配した政治的主権者についてみても、漢魏晋・前涼・西涼・隋唐・宋初・明初・民国以後等の漢族を除けば、前秦・後涼(以上氐族)、北涼(匈奴系)、北魏・西魏・北周(以上鮮卑族)、吐蕃(西藏族)、西夏(党項族)、元(蒙古族)、吐魯番(維吾爾族)、清(滿洲族)と非漢族の方が長期にわたっており、しかも一、二種ではなく多数の種族が交代している。もっとも異民族王朝の支配といつても、支配者自体漢化する傾向を免れ

戻つたら褐六段を返す(五割の利息)借用文言が見えている。龍部落・龍家とよばれる外族集團は河西各地に分居し、当時交通路の警衛などに大きな役割をになっていたらしい。何願徳は連署している弟の何定徳とも全く中国式命名を示すから、起源は不明ながら漢化した商人である点は明らかであり、南方山岳地帯の牧民との交易に従事していたとみられる。八世紀の敦煌・吐魯番文書には、敦煌に定住したソグド人商人の聚落(徒化⁽⁷⁾)や、敦煌・伊州・西州・安西(クチャ)等を往来する興胡ソグド商人の活動を示すものが知られており、往時この城市の果した流通経済面での重要な役割をうかがうことができる。

吐蕃の'Gos 部落に生まれ、敦煌に来て仏教を学び梵・藏・漢三語によく通じ、やがて吐蕃贊普に召されてチベット語への仏經翻訳に精励して後、河西におもむき敦煌や甘州で講説・仏典漢訳を進め、晩年は吐蕃を撃退して河西を再び唐朝の配下に復し帰義軍節度使に任せられた張義潮(?!八七二)に迎えられて、敦煌で弟子の漢人僧侶たちに瑜伽論等の講義を続け、八十歳近くで示寂した

吳法成('Gos chosgrub、約七八〇—約八六〇)のことき偉大な学僧の存在は、この地の国際的性格をよく象徴している。十世紀の敦煌の支配者であつた帰義軍節度使曹氏一族は、トルコ系の甘州ウイグルやイラン系の于闐の王族と深く通婚関係によつて結ばれていた。今も莫高窟六一窟の壁にかれら一族五十余名の供養像を見ることができ、中国人・中国文化を中心とした多様な外族・外来文化を吸收した敦煌の姿が如実にうかがわれるのである。

辺陲の小都市敦煌が世人の注目をあびるのは、ひとえに大石窟莫高窟の造形芸術と、窟内の藏經洞から発見された数万点の遺書・美術工芸品等の両群の文化財のためである。一九四〇年代からこの地に研究施設がおかれた新中国になって格段の充実をみせ、今日では段文傑所長以下百名近い所員を擁する敦煌文物研究所が、その修理保護と研究のセンターとして目ざましい活動を展開している。

敦煌周辺には莫高窟の他西千仏洞・榆林窟（万仏峡）・水峡口の三石窟が遺存するが、その規模と遺存内容の综合体からみて莫高窟が際立つて重要性をもつ。莫高窟を歴史的に検討する際、先ず手掛りとなる文字記録は、第三三窟に旧時建てられていたが、今日では一部残石を敦煌文物研究所に残すだけという李氏莫高窟佛龕碑（武周聖曆元年（六九八））に見出される。この碑は嘉慶年間（一八二三—一〇）に新疆へ流謫された徐松が莫高窟で原碑を見て『西域水道記』（一八二三）巻三に碑の表裏合せて二千二百余字を著録公刊して以来世にきこえ、清末の代表的金石学者葉昌熾は『語石』（一九〇九年）卷一・卷八で則天文字及び繁体数字の使用例に本碑を取り上げて論じている他、羅振玉は『西陲石刻錄』（一九一四年）に善拓に拠つて全文載録しており、その後甘肃省文獻徵集委員会の校印になる『龍右金石錄』（一九四三）巻二には碑陽のみ著録されるから、当時すでに碑陰は磨滅していたのであらう。その後莫高窟を詳考された石璋如・李永寧諸氏が本碑全文を校録され、我々は容易にその本文に接することができる。

更に幸いなことに、藏經洞発見の写本（太上藥報因緣經「卷三」残巻）の紙背に、本碑を抄録したものが王重民氏によつて発見され、王氏と宿白・陳祚龍諸氏により碑文校定に活用され、その成果は李永寧氏錄文にも受継がれている。⁽¹³⁾ 只この写本は首尾を欠き、一部に後筆の落書きが全面的に補うことを得ない。しかし幸運にも莫高窟の歴史を叙述した肝心の個所はほぼ欠字なしにうめることができたのである。当該部分の原文は原碑の第一三〇一五、一九〇行にわたり、

莫高窟者、厥⁽¹⁴⁾秦建元⁽¹⁵⁾，有沙門樂傳、戒行清虛、執心恬靜。嘗杖錫林野、行至此山。忽見金光、狀有千佛。遂架空鑿⁽¹⁶⁾、「造窟一龕。次有法良禪師、從東窟此、又於傳師窟側、更即營建。伽藍之起、濫觴於二僧、復有刺史建平公・東陽王等、各修一大窟。而⁽¹⁷⁾後合州黎庶、造作相仍。実神秀之幽巖、靈奇之淨域也。……（中略）……

爰自秦建元之⁽¹⁸⁾，迄⁽¹⁹⁾大周聖曆之辰、樂傳法良發其

宗、建平東陽弘其迹。推甲子四百七歲、計窟室一千余龕。今見置僧徒、即為崇教寺也。君諱義、字克⁽²⁰⁾讓、敦煌至也。云々（左旁。を付した字は原石に欠け、写本で補つたもの）

の如く読める。即ち莫高窟の開鑿者として沙門樂傳、ついで法良禪師の両者、その年代を秦（前秦・苻秦）の建元二年（三六六）と明示するとともに、両僧の二龕の後に二人の刺史建平公と東陽王らにより夫々一大窟が營建され、やがて全州の庶民にまで造窟が普及し、本碑の武周聖曆元年（六九八）まで約四百年間に計一千余窟を算え、現在は僧達がここに住んで崇教寺となつてゐる、と窟の歴史を概観しているのである。この李氏碑の叙述は、今日に至るまでの敦煌研究者の検証を通じ、概ね信憑性の高いものと認められている。例えば刺史の建平公は北周の保定・建德年間（五六五—七六）ころ瓜州刺史に任じた干義に当り、第四二八窟がその造顕になる大窟と推定され⁽²¹⁾、又東陽王は北魏の宗室（明元帝の四世孫）で孝昌元年から西魏大統八年（五二五一四二）頃瓜州刺史であった元太宗と認められ、第二八五窟がその建造になるものと考

えられる⁽¹⁵⁾。かように碑文の史実性が裏書きされてくると、樂傳・法良に關する伝承も現地に残された貴重な証言と認定することが許されよう。徐松は、敦煌の長老趙吉から「乾隆癸卯（一七八三）莫高窟畔の沙中から〈秦建元二年沙門樂傳立〉と記した断碑が掘り出されたが、まもなく沙に埋没してしまった」という話を聴いたと記しており、道光十一年から十四年の間敦煌県令であつた許乃穀も千仏巖歌の序文中に秀才趙吉に全く同じ話をきいたことを叙述⁽¹⁶⁾、このことは蔣超伯『南潯拾語』巻一石仏条にも見えている。もしこの趙吉の言が事実なら、樂傳造窟の直接史料となるが、李氏碑中に「秦建元二年」及び「沙門樂傳」の全く同じ文字が含まれてゐるので、本碑の記憶と何らかの混同があつた可能性を否定しきれず、他の旁証が見出されぬ限り積極的に採用するのは躊躇される。

現存最古の窟は十六国時代末期、西涼、北涼の時代（五世紀前期）に属す二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七五の計七窟と認められており、それ以前四世紀のものは既に後世の造窟により壊され無く

なってしまったとみなされている。

なお莫高窟の起源に関しては、敦煌写本に別説が見え、「今時窟並已麁新。從永和八年癸丑歲（永和九年癸丑^(第)三五月）刑建窟、至今大漢乾祐二年己酉歲（九四九）、⁽¹⁸⁾竿得伍伯玖拾陸年記。」とあるので、この『沙州城土鏡』なる地誌の伝える永和創建説をどう考えるべきか問題となる。『沙州城土鏡』の略抄本とおぼしきこの仏典紙背の記事は、五代後期のもので形式も整はず誤字も目立つ上、永和は江南の東晉の年号で、當時前涼の張重華の支配下にあった敦煌では西晋の建興の元号を襲用しており、一般に信用できぬものとされる。『沙州城土鏡』の記事には、七世紀後半に編纂された『沙州圖經』に由来するとのみなされるもの多く⁽¹⁹⁾。従って永和創窟説も『沙州圖經』に遡る可能性は否定できない。しかしこれは樂樽のばあいのように、拋るべき石刻の類が存した形跡ではなく、恐らく隋唐代になつて東晉南朝を正系とする歴史意識が定着した段階で生まれた後出の憶説と推察され、かの著名な王羲之〈蘭亭序〉との連想などから、永和九年癸丑という年が持出されたのであろう。

ところで李氏碑は、徐松によると碑首に「大周李君修功德記」という八字の篆額が已に剥落すと伝わり、碑陽第一行には
 大□□□□□□□□上柱園李君莫高窟□龕碑并序
 首望宿衛上柱園敦煌張大忠書 弟応制舉□□□□□
 とあつた如くである。羅氏『西陲石刻錄』は首行を作り、「龍右金石錄」の張維注に引く旧拓本は
 首望宿衛上柱園燉張大忠書 弟応制舉□□□□□
 大□□□□□□□□校尉上柱園李君莫高窟□龕碑并序
 首望宿衛上柱園敦煌張大忠書 弟応制舉□□□□□
 原文は左の様であったと復原されよう。
 大□□□□□□□□
 (周) (燉)
 首望宿衛上柱園李君莫高窟□龕碑并序
 に作つており、相互に異同がある。毎行五〇字の本碑規格を前提に、最も古く原碑を実見著録した徐松の記録を尊重し、諸他拓本による羅・張等の錄文を参照すると、
 首望宿衛柱國敦煌張大忠書
 大□□□□□□□□
 (燉)
 校尉上柱園李君莫高窟□龕碑并序
 首望宿衛上柱園燉張大忠書 弟応制舉□□□□□
 □字

碑陰末行下段に「造碑僧寥廓 上柱園鑄字索洪亮」とあるので、本碑の製作は僧寥廓が当り、上柱園索洪亮が刻字した訳で、首行の弟某は文の撰者とみなされよう。李義の弟は本碑陰に刻された者が懷節・懷忠・懷恩・懷操と四名に上るから、応制舉とあるのはその中のいずれかである。

李氏仏龕碑につぐ莫高窟の重要な資料は、周知の「莫高窟記」である。これは第一五六窟（張議潮窟）前室北壁に、左から右に向け全十一行墨書きされているが、現在では剥落がひどく読みとれぬ文字が少なくない。しかし幸い敦煌写本に抄録したものが王重民氏によつて紹介され⁽²⁰⁾、全文を知ることができる。一五六窟題記は、謝稚柳・史岩⁽²¹⁾氏の錄文が公刊されているが、共に一九四三年頃実見されたものにもかかわらず随分異同が多く、その読みにくさを印象付ける。左に窟記の字配りに準じて原文を掲げ、剥落個所は写本によつて補い以下の検討にそなえる。（右傍（）は写本の異字）

1	莫高窟記	可有五百余龕。又至延載二年、禪師靈隱、 ^(其) 與居士陰祖等、
2		二僧。晉司空索靖、題壁号仙慈寺。自茲已後、鑄造不絕、
3		多諸神異。 ^(後) 復於禪師 ^(其) 窟側、又造一龕。加藍之建、塗于
4		之狀、遂架空鑄鐵、大造龕象。次有法良禪師東來、
5		門樂僧、杖錫西遊至此。 ^(遙) 礼其山、見金光如千仏
6		右在州東南廿五里三危山西。 ^(上) 秦建元之世、有沙

図等が完成し莫高窟記が題書された年次とみられる。大曆三年をどうして記録しているのか詳らかでないが、安史の大乱後唐の勢力が河西・西域より退潮して吐蕃の進出を許し、河西節度使も永泰二年（大曆元年、七六六）、涼州から沙州敦煌に遷った事実⁽²⁴⁾を考慮すると、この時点でも高窟に新節度楊休明による銘記が施され、記念すべき年とされていたのであろう。

莫高窟記の樂儻・法良創龍に関する記事は李氏碑のそれを承けているのが明瞭である。但だ索靖題壁は李碑に見えず、樂儻の在世より数十年遡る話だけに後出の伝説と察せられる。仙巖の呼称は唐代住民にも殊に好まれ、仙巖を名のる者も一二にとどまらぬ程であった。八世紀初の敦煌の地方官の手で張芝（敦煌出身の後漢の草書の名人）の臨池遺跡が搜索顯彰された事実⁽²⁵⁾と考え合せると、當時敦煌の生んだ最著名人で能書の誉高い索靖にまつわる莫高窟題壁の伝承が喧伝されたのも推察にかたくな。武周時代の北大像と開元年間の南大像造顛の記事は重要なもので、今日でもこの両大像は莫高窟の目玉といえる。後に節度孔目官兼御史中丞の肩書をもつ楊洞芋

復原する作業は藤枝晃⁽²⁶⁾・賀世哲・孫修身⁽²⁷⁾・史金波⁽²⁸⁾・劉玉権氏⁽²⁹⁾らの労作で推進され、既にアウトラインを見通せるようになつた。

莫高窟の重要性を格段に昂めているのが、藏經洞に封蔵されていた膨大な敦煌文献である。内陸アジアの乾燥地帯で前世紀以来発見された古文献は夥しく、歴史・言語・文学・宗教をはじめ、広大なユーラシアを対象とする新たな学問領域の進展を促してきた。それら新出資料の中で敦煌文献は、まず数万点という莫大な量と、四〇一世紀初に亘る古さと年代の拡がり、更に多様な言語を含み、しかも千年近く封蔵されていたので長卷・冊子の原型をとどめる諸点において、主として寺院や城居遗址或いは墳墓から発掘され、殆ど断巻零葉しかとどめぬ他地発見資料群とは異なる格段の豊富さを誇っている。これらが封蔵されていたのは、莫高窟北端に近い第十六窟の北壁に附設された小耳洞十七窟で、普通藏經洞と呼ばれている。四畳半たらずのごく小室は、北壁の高さ半ばの台上に高さ九四センチの僧洪辯の塑坐像をすえ、その奥壁に両樹をはさんで尼と侍女が立っている絵が描かれ、

（一作芋）が撰した『瓜沙両郡編年記』にも開元九年（七二一）にかけて、「僧處⁽³⁰⁾該、鄉人百姓馬思忠等とともに、發心して南大像弥勒を造る、高さ一百廿尺。」の記事がある。大像は弥勒と呼ばれている。しかし巨像造像が華嚴經等の説く毘盧舍那佛信仰の流行を反映して武后時代から目立つており、敦煌の両大像もそれに連なるものと解されよう。奈良東大寺大仏とも石塑と鋳銅の違いこそあれ、その造顛の理念には共通の背景が存したのであり、龍門の大仏を介して、東西辺疆にまで波及した宗教と造形のモニュメントをこの目で確かめることができるのである。南大像の鎮座する一三〇窟では、一九六五年壁画補強工事に際し、南壁西端の底層壁画の下の岩孔内から、開元十三年七月十四日の康優婆姨の患眼平癒を祈る願文をもつ幡が発掘され、本窟開鑿が開元に遡る点が確認された。南北両大仏に象徴される莫高窟のピークを過ぎると、造窟関係の記録は却つて数多く残つており、九世紀後半張氏帰義軍節度使時代に再興の氣運を示し、なお十世紀の曹氏帰義軍時代、西夏時代と残暉を留めている。当代造窟を文献・銘記を手掛りに編年し莫高窟の歴史を

西壁の龕に大中五年（八五二）洪⁽³¹⁾誓告身勅牒碑がはめこまれている。すなわちこの耳洞は京城内外臨壇供奉大德兼駕門河西都僧統攝沙州僧政法律三學教主賜紫沙門の榮職にあつた敦煌の高僧洪辯の影窟（肖像を安置する記念室）であつた。十六窟とその上の三六五窟も、共に吳洪辯の指導下で九世紀中葉建造されたもので、壁面は西夏時代に重繪されたが、構造は中唐の原形を伝える。十七窟の洞口（高一丈半、幅半尺）が封じこめられたのは、十一世紀前半節度使曹宗寿の時代であつたと考えられている。当時すでに洪辯寂後百數十年を経てその業績も忘れられ、子孫にこの影窟を守護する者も絶えたのであろう。ここに堆積されたものは、漢文写經をはじめとし布絹の幡幢や印仏・画幅に至るまで概ね仏寺に属す諸法具で、寺院の經藏や文書庫から、古くなつて傷んだり不要になつたりして退蔵されるに至つたものである。從つて敦煌の数寺の旧蔵にかかる写本の大藏經が見出された（三界寺藏經・報恩寺藏經等の捺印を有する）が、どれも一、二巻かせいぜい数十巻の端本であり、一部取換えて廃棄された殘本とみられる。仏典以外の儒家・道家の写本や官序文

書の残巻等もあるが、いずれも寺院で廃紙として二次利用されたものを主とし、さもなければ断片的夾雜物にすぎない。かように敦煌文献は、我国の古社寺に伝世された經典文書と根本的に異なり、最も保存の要ある貴重品を原則的に含まぬ所に、その本質を有する。しかしその為却つて普通では後世に伝わらぬ日常資料を豊富に我々に与えてくれる。それをいかに活用し人間生活の過去の真相を解明するかは、我々に委ねられた課題である。

四 造窟にかかわる人々

莫高窟記や李氏碑にみられる如く、莫高窟の歴史に最もかかわりのあるのは

四世紀	樂僔・法良
六世紀	東陽王・建平公 善喜
七世紀	靈隱・陰祖 李義
八世紀	處諺・馬思忠

のよう仏僧と地方長官と在地有力者の三者である。九世紀の洪辯や張議潮・張淮深ら節度使、十世紀の曹議金・曹元忠ら節度使をはじめとする造窟者をみても同様

である。そして前期では僧も地方長官も外來者を主とし、後期ではすべて土着者となる点が目立つていて。敦

煌文書のおかげで造形と文字資料を総合して考察できるのは、大体五～十世紀間に限られるが、八世紀末に吐蕃の占領下に陥つて以後は、帰義軍時代に中原に遣使しその正朔を奉じていたとはいえ、節度使を世襲し自ら王を称したことさえあり、基本的に独立した地方政権であった。従つて北魏や隋唐時代に中原文化とさして落差のなかつた敦煌も、中唐以降は中國内地と概して隔絶された辺土となるのを免れなかつた。九・十世紀の敦煌で貨幣が殆ど使われず、布帛や穀物を取引の媒介に使う実物經濟に退化したのはその顕著なあらわれである。敦煌写本に含まれる中國内地から齋されたものの比率も、盛唐以前に比し中唐以降でかなり小さくなり、暦も中原と異なる地方暦を用いたので、月朔干支や置閏が内地とずれることがしばしばあつた。

敦煌の住民を通観してまず注目されるのは、張氏を始めとし索・李・氾・陰・曹・宋・令狐氏等有力氏族の存在である。後漢末に建てられた邵陽令曹全碑によると、

敦煌効穀の人である曹氏は漢初の功臣曹參の裔を称し、雍州から隴西や敦煌へと拡がつたもので、全に至るまですでに五代仕官し二千石も生み出す有力氏族に成長していたことを伝える。これによれば二世紀には敦煌にも既に豪族といえる姓族が存在したわけで、続く魏の時代に「大姓雄張」といわれ（『三国志魏書』食憲伝）、唐代にも「豪族士流、家々自足」（『沙州圖經』卷三）とうたわれる基礎が築かれていた。殊に永嘉の乱以後華北が五胡の混亂時代に陥ると、河西の地は相対的安定地帯となり中原から逃れてこの地に来住する土族も少なくなかつた。敦煌の生んだ著名人は三、四世紀に集中しており、混血の訛経僧空法護（敦煌菩薩）や將軍で能筆の誉高い索靖はその代表であつた。五世紀の敦煌の学者劉昞は『敦煌実錄』を著わしこの地の人物の逸話を多く録したが、これを読んだ盛唐の歴史家劉知幾は、西邊の敦煌に人材の多いのに感嘆の言を發している。⁽³⁶⁾ 五世紀初にこの地を本拠とする十六国の一の西涼政権が発足し得たのも、かかる地域社会の充実、有力氏族の成長が前提をなしていた。

それだけに西涼を併合した武威の北涼政権が五世紀中葉

北魏の軍門に降り、河西の有力者文化人が多く代都へ遷されるに及んで、敦煌の名族も衰退過程に入つた。しかしながら數百年にわたつてオアシス社会の代表者の地位を占めたのは、数姓の有力氏族であつた。かれら大姓相互間には通婚が頻繁に行なわれ、氏族社会ともいべき上層集団が形成され、政治・經濟・文化の各般にわたつて常に地域社会のイニシアティヴをとつていていたのである。

敦煌文書に現れる住民は姓名のわかる者が一万人を越えるが、その姓の分布をみると、興味深いことに敦煌名族の大姓と同じ者の占める比重が大きい。名族筆頭の張氏は、全住民の約十五%を占め、索・王・李・氾・陰・安・曹・宋・令狐諸氏を加えた計十姓では、實に全人口の六割近くに達する。土肥義和氏が八世紀末～十一世紀初の敦煌住民一万余人について調査された所によると、全体で姓の種類は約一五〇種にも達するにもかかわらず、下位百姓の人口を合計しても全体の八%弱にすぎず、張氏一姓の約半分にすぎない。⁽³⁷⁾ 又外族の胡姓に属する者の比率は全住民の一割を超えるが、名前が漢風でなく胡名を称する者は稀で、胡姓の数%にすぎない。従つて

七、八世紀にソグド人の聚住した從化郷の如き特別なコロニーを除けば、居住外族の漢化が相当進んでいたと判断してよい。さて李氏碑の書者張大忠は自ら「首望」と特筆しているが、これは望族（名族）筆頭を意味する。

窟主李氏は西涼の王室李暠の裔を称し、唐の帝室隴西李

氏と同族に属すこととなる。李氏一族は特に莫高窟と縁が深く、義（懷謹）の弟の孫李太賓は一四八窟に大曆一四年（七七六）の修功德記碑（背面に太賓の曾孫明振の再修功德碑を刻す）を持つ。李明振は帰義軍節度使張議潮の娘と結婚しており、九世紀にあっても最高權力層グループに属した。しかし十世紀になるとその子孫で特に顯れた者は見出しがたい。確実に七、八世代たどれるこの李氏の例は敦煌では稀有に属し、節度使張氏・曹氏の家系すら五、六世代を知り得るにすぎぬ。すなわち名族にあっても確実な系譜伝承は十二世紀に限られており、遠祖や移住の祖との結びつきは多く曖昧である。この点は多数の同姓者の中から成上った者が誰でも郡望を称し、名人の裔を宣伝する一般的背景の当然の結果である。北大像を造る主動者となつた陰祖は、『敦煌名族志』残巻によると

「隋唐已来、尤も望族と為る。」と特筆されており、父祖ロニーを除けば、居住外族の漢化が相当進んでいたと判断してよい。さて李氏碑の書者張大忠は自ら「首望」と特筆しているが、これは望族（名族）筆頭を意味する。

窟主李氏は西涼の王室李暠の裔を称し、唐の帝室隴西李氏と同族に属すこととなる。李氏一族は特に莫高窟と縁が深く、義（懷謹）の弟の孫李太賓は一四八窟に大曆一四年（七七六）の修功德記碑（背面に太賓の曾孫明振の再修功德碑を刻す）を持つ。李明振は帰義軍節度使張議潮の娘と結婚しており、九世紀にあっても最高權力層グループに属した。しかし十世紀になるとその子孫で特に顯れた者は見出しがたい。確実に七、八世代たどれるこの李氏の例は敦煌では稀有に属し、節度使張氏・曹氏の家系すら五、六世代を知り得るにすぎぬ。すなわち名族にあっても確実な系譜伝承は十二世紀に限られており、遠祖や移住の祖との結びつきは多く曖昧である。この点は多数の同姓者の中から成上った者が誰でも郡望を称し、名人の裔を宣伝する一般的背景の当然の結果である。北大像を造る主動者となつた陰祖は、『敦煌名族志』残巻によると

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、實に帝国の西のまわりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となつたことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言ではない。石窟の中に丹誠こめて造顯された淨土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもつていていたとみられる。

権力者・名族以外の住民も、グループを作つて社による造窟に努め、來世への願望を形に表す活動に参加した。帰義軍時代には壁画製作を担当する画師の組織（画行）やそれを管轄する（画院使）も設けられていた。敦煌住民は殆ど誰でも莫高窟と相当のかかわりをもつており、石窟は地域社会の縮図といえるほどである。

五 敦煌研究の進展

重民他編『敦煌變文集』（一九五七）、王重民『敦煌古籍叢錄』（一九五八）の如き敦煌資料のまとまつた集録や解題も提供され、広汎な研究者が各方面から容易にこれを利用しうるようになつたのである。

今世紀初、藏經洞に封閉されていた敦煌文獻等が世に知られ、スタイン、ペリオ等の外国への持出しにより世界に衝撃を与えてから数年間を敦煌研究の草創期とする。その後二回の大戦を経たり、資料の散在が組織的研究の発展を妨げた為、その進行は遅々としていた。それが戦後一九六〇年前後に、敦煌研究は飛躍的進展を示した。この時期に敦煌写本の基本目録—ジャイルズ目録（一九五七）・ラ・ヴァーレ・ブサン目録（一九六二）・ラルー目録（第三卷、一九六一）・メンシコフ目録（一九六三・六七）が相ついで公刊され、王重民編『敦煌遺書總目索引』（一九六二）により漢文写本のほぼ全容に見通しをつけ得るようになつた。

更に榎一雄先生らの骨折りで大英博物館のスタイン敦煌文獻既整理分全部のマイクロ撮影が一九五三・四年に完成、研究者の利用に供されるようになり、多数の研究者が日常的に写真を活用できるに至つた。同時に王

「隋唐已来、尤も望族と為る。」と特筆されており、父祖の名も伝わらず七世紀以降急速に抬頭したことを知る。かように名族社会の伝統の千年も続いた敦煌でも、個々の家についてみれば大きな社会変動の波にもまれていた。

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、實に帝国の西のまわりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となつたことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言ではない。石窟の中に丹誠こめて造顯された淨土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもつていていたとみられる。

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、實に帝国の西のまわりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となつたことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言ではない。石窟の中に丹誠こめて造顯された淨土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもつていていたとみられる。

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、實に帝国の西のまわりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となつたことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言ではない。石窟の中に丹誠こめて造顯された淨土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもつていていたとみられた。

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、實に帝国の西のまわりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となつたことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言ではない。石窟の中に丹誠こめて造顯された淨土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもつていていたとみられた。

名の日本の研究者（長谷敏雄・秋山光和・岡崎敬氏他）も協力しており、印刷面では平凡社との合作になる。同時に海外でも、パリのギメ博物館所蔵のペリオ将来品について、ペリオ石窟調査ノート（註⁽²²⁾参照、全六巻予定、最近までに四巻出たときく）公刊や幡幢・布絹画の詳細な解説目録と図録が刊行され⁽⁴⁰⁾、又ロンドンの大英博物館のスティン将来絵画類についてもロデリック・ウイットフィールド氏の大著が上野アキ女史の訳で刊行中である。かよう

に八〇年代になって敦煌の壁画と布絹画が全面的に精良な色彩図版と研究を伴って公刊され、研究の新紀元を迎えることとなつた。本特集に変相画が各方面から多角的に検討されるに至つたのも、かかる数年来の研究の高潮を前提としている。

近年における敦煌研究のたかまりを最も強く印象づけるのは関係定期刊行物の簇出である。敦煌関係の最初の逐刊『敦煌学』が潘重規氏らの手で香港で創刊されたのは一九七四年のことだ、同誌は今日まで台北に発行地を変えて八輯（一九八四）まで継続刊行され、台港地区の中

国人研究者を主体に文学や伝統的文献学・通俗宗教文献

の追求に力を入れ、海外からの寄稿も少なくない。敦煌学関係の中文論考のビブリオグラフィーは網羅につとめており、参考価値に富む。一九八〇年には甘肃省蘭州の蘭州大学から敦煌学研究組の編による『敦煌学輯刊』が蘭州大学々報の一環として刊行され、大体年刊で六輯（一九八四）まで出ている。執筆者は蘭大スタッフに限らず、敦煌文物研究所や国内各大学・博物館・研究所等の専家にわたり、歴史を中心に各分野の研究を収める。更に八年には敦煌文物研究所の手で『敦煌研究』試刊一期が出版され、石窟芸術研究を中心とした論考をのせ、第三回目から正式に『敦煌研究』（一九八三）として公刊された。その他蘭州大編の『西北史地』中西学会編の『中西学刊』等の雑誌にも敦煌学にかかわる論文が出るのはいうまでもない。わが国でも「月刊シルクロード」「季刊東西交渉」「ユーラシア（新）」等の雑誌があるが、仲々永続せず、敦煌研究の専門誌は未だ現れない。ただ種々の雑誌の敦煌関係特集号に見るべきものがままあるのは周知のとおりである。敦煌学の逐刊と並んで大規模な研究集会の開催も注目をひく。一九七九年十月パリでペ

リオ生誕百年記念として、八五〇十一世紀の中央アジアの写本と石刻⁽⁴¹⁾をテーマとする国際集会が開かれ、世界各地における資料貯蔵や整理研究状況が報告されるとともに、中国学・チベット学・古代トルコ学の廿数篇の研究発表があり、一九八一年 Journal Asiatique の特集号として会議紀事が公刊された⁽⁴²⁾。一九八三年は、二月にパリでセンジエ・ボリニヤク財團主催による仏・中両国学者による敦煌壁画と写本のシンポジウムがあり、その紀要が最近刊行された⁽⁴³⁾。同年八月には蘭州で中国敦煌吐魯番学会成立大会及び全国敦煌学術討論会が挙行され、百五十名の参会者を集め、百十五篇の報告が読まれた。その主要内容は二冊の論文集として近刊が予告されており、敦煌文物研究所からは「敦煌研究」の同学術討論会特刊⁽⁴⁴⁾が出ており、参加者の年令とステータスを左のように統計表示している。

年令 参加人数 百分率

三四歳以下 六人 四 %

三五・五五歳 九四人 六二・七%

五六歳以上 五〇人 三三・三%

教授・研究員・研究館員	三四人	二二・六%
副教授・副研究員・副研究館員	三八人	二五・四%
講師・助理研究員・館員	七二人	四八 %
助教・研究実習員	六人	四 %
又提出論文百十五篇の内容は左の如く分布している。		
石窟と考古	一六篇	五篇
美術	一四篇	一八篇
舞踏音楽	一三篇	二二篇
歴史	一四篇	一三篇
言語文字	二二篇	
民族学	一〇人	三人
文献学	一〇人	一人
科学技術	一人	

参加者の専門の分布も左の如く、

造形研究者と文献研究者が相半ばしており、比較的高齢者が多い。又芸術と文学研究が盛んで、他面宗教に関する研究者と報告が頗る乏しい点も特徴的といえよう。いずれにせよ、かくも多数の関係研究者を擁する中国で、全

領域を総合する大学会が結成され、北京（遺書研究）・蘭州（敦煌研究）・鳥魯木齊（吐魯番研究）の三センターを中心とし、敦煌文物研究所・国家文物局古文献研究室・北京大学中古史研究中心・武汉大学魏晋南北朝隋唐史研究室等の関係機関と密接に提携して敦煌研究が積極的に推進される事態を迎えたことは、特筆に値する。まさに八〇年代は敦煌研究が空前の隆盛期を迎えたと称して過言ではないであろう。そこでは「敦煌吐魯番学会」と、吐魯番研究が併称される点は留意されるべく、両者が車の両輪のように相補い相助することによって、一層の展開が期待されているのである。さて同じ八三年八月末から九月初にかけては、東京・京都で第三回国際アジア・北アフリカ人文科学会議が開かれ、その敦煌・吐魯番研究セミナーでも日本人を主に十数名の報告がなされ、翌年レジュメを載せる議事録が刊行された。⁽⁴⁹⁾ かような学界の活気は凝つて幾多の論文集を生み出しつつある。敦煌文物研究所編『敦煌研究文集』（甘肅人民出版社、一九八二）、⁽⁵⁰⁾ 北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』⁽¹⁾（中華書房、一九八二）⁽²⁾（北京大学、一九八三）、⁽⁵¹⁾ 武京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』⁽¹⁾（中華書房、一九八二）⁽²⁾（北京大学、一九八三）、⁽⁵²⁾ 武

敦煌研究論集』⁽³⁾（パリ極東学院、一九八四）等はその頭著なものであり、敦煌研究についてみれば、造形研究と文獻研究の総合をめざす傾向が全体に強まるとともに、中国では吐魯番文書研究の深化を契機に社会経済史や法制・制度史の研究が急速に進み、フランスではその学問の伝統を反映して宗教文化の追及が深まっている。

パリのペリオ蒐集全部のマイクロが完成し、八〇年前後に中国・日本等で閲覧利用が可能になったことも、写本・文書研究の画期的前進を支えた。今や敦煌写本で写真の見られぬのは殆どレニングラードのみとなり、それについても遅まきながらチュゲイエーフスキーキー氏の労作第一巻が刊行をみた。⁽⁵³⁾

他方では資料そのものの影印も拡まり、道教写本をほぼ網羅した大淵忍爾氏の労作や、周祖謨氏による韻書の

さて以上近年における敦煌研究のめざましい展開を一瞥してきたが、そこで強く印象に残るのは中国における研究体制の整備と、研究活動の空前の盛況である。一九三〇年代には、「敦煌は吾国学術の傷心史なり」と嘆ぜられたのが、新中国の成立後「昔日の莫高窟は、豺狼の鬼狐と友なりしが、今日の莫高窟は、美麗なること画図の如し」⁽⁶⁴⁾ とうたわれ、今日その黄金時代を迎えようとしている。海外でも、パリの研究グループの作業が、編目に論文集・研究書の刊行にめざましい成果を示しつつある。今後当分の間、われわれは新刊の応接に寧日ない嬉しい悲鳴が続きそうである。

敦煌研究の展開に呼応して導論の類が幾つも現れ、他方では包括的な講座も計画された。⁽⁶²⁾ その外いわゆるシリ

クコードブームに乗って、日本では夥しい関係出版物が見られたが、学術的に価値あるものは概して少部数の専門書で、両者の乖離は容易に埋められぬままである。

スペースの制約もあり、チベット文を始めとする少数民族語資料については殆ど触れられなかつたが、現在印刷中の山口瑞鳳編『講座敦煌6敦煌胡語文献』は、邦語の参考書として学界の渴を愈すものとなろう。

註

- (1) 敦煌郡の設置年代は、『漢書』卷六武帝紀に「(元鼎)六年(B.C.一)……武威・酒泉の地を分つて張掖・敦煌を置き、民を徙して以てこれを実す。」同書卷二八下地理志下敦煌郡條に「武帝の後元年(B.C.八八)、酒泉を分つて置く。」と二様に伝えられ、今日まで種々議論されてきたがなお定説を見ない。比較的よく採用されているのは太始・征和の交(B.C.九三~九二)とする日比野丈夫氏の説〔河西四郡の成立について〕東方学報二五、一九五四、「漢の西方發展と両闕開設の時期について」

て「東方学報」二七、一九五七。共に同著『中国歴史地理研究』所収、同朋舎、一九七七)である。榎一雄「漢魏時代の敦煌」『講座敦煌2敦煌の歴史』大東出版社、一九八〇、二一頁以下参照。古代敦煌の歴史を概観した近作では、宿白「西漢魏晋南北朝時期的敦煌」『絲路考古』収、「一九八三が要を得て」いる。

- (2) 『漢書』卷二八下地理志下敦煌郡条。
 (3) 『通典』卷一七四州郡四、古雍州下、晋昌郡(瓜州)条に「戸一千一百六十七、口三千八百六十四」、燼煌郡(沙州)条に「戸六千三百九十五、口三万二千一百三十」と伝える。
- (4) 金岡照光「敦煌の現状」一九七九年五月『講座敦煌1敦煌の自然と現状』一九八〇、八〇頁。なお民国時代一九四一年の甘肃各県戸口調査報告では敦煌県人口は二万七〇五一人であったという(蘇鑒輝「増訂再版敦煌學概要」国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八一、七八八頁)。この数字が現実を正確に反映したものなら、新中国になって敦煌の人口は空前の増加を示したこととなる。なお敦煌の人口の変遷については、齊陳駿「敦煌沿革与人口」『同統』(蘭州大学々報一九八〇一二、敦煌学輯刊二、一九八二)参照。

- (5) 『後漢書』志第十三郡国五、敦煌郡条。「國は乾位に当り、地は良墟に列す。水に懸泉の神あり、山に鳴沙の異あり、川に蛇虺なく沢に兕虎なし。華・戎交わる所の一
- (6) 大英図書館所蔵スタイン将来敦煌漢文文獻S四四五五
 (7) 抄稿「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」ヨーラシア文化研究1、一九六五参照。
- (8) 吳其昱「大蕃國大德・三歲法師・法成伝考」(福井文雅・樋口勝共訳)『講座敦煌7敦煌と中國佛教』一九八四参考。
- (9) 森安孝夫「ウイグルと敦煌」『講座敦煌2敦煌の歴史』三二二頁以下参照。

- (10) 陳万里「西行日記」北京樸社、一九二六、九二頁には、一九二一年白系ロシア人により本碑が破壊され二つに割れていたという。
- (11) 石璋如「敦煌千仏洞遺碑及其相關的石窟考」中央研究院歴史語言研究所集刊三四上冊、一九六二、三八一四二頁。
- (12) 李永寧「敦煌莫高窟碑文錄及有關問題」敦煌研究1、一九八二、五六一六一頁。
- (13) バリ国立図書館所蔵ペリオ将来敦煌漢文文獻P二五五一背。王重民氏の校訂文は、李永寧氏によって依拠された旨李氏論文に明記されているが、まとまつた形で公表されなかつたらしく、近刊の王重民『敦煌遺書論文集』中華書局、一九八四にも収められていない。陳祚龍「敦煌新記」(一)關於莫高窟的「大周李義碑」(二)關於莫高窟的「大周李義碑」幼獅学誌一
- (14) 宿田、同(13)論文四〇八一四一〇頁。施善亭「建平公与莫高窟」『敦煌研究文集』甘肅人民出版社、一九八二、一四四一五〇頁。
- (15) 李永寧、同(12)論文、六二頁。但し宿田氏、同(13)論文は東陽王窟を二六三・二六五・二四六の三窟のいすれかとされる。東陽王元宗については、羽田亨「敦煌千佛洞の營造に就きて」歴史と地理二〇一一、一九二七、『羽田博士史學論文集』上巻収、一九五七。趙萬里「魏宗室東陽王榮与敦煌寫經」中德學誌五一三、一九四三。藤枝晃、*The Dunhuang Manuscripts, A general description, Part II, Zinbun 10*, 一九六九、一一、一九頁等参照。

- (16) 許乃毅『瑞岩軒詩鈔』巻四。
- (17) 蘇鑒輝氏は、前秦樂樽碑の所伝を武周李君修仏龕碑の誤伝と断定されてくる(前掲註(4)同書二三四頁)が、推測にとどまり裏付けの証拠を示されてはいない。
- (18) P二六九一背。P. Pelliot 羽田亨共編『敦煌遺書活字本』第一集、上海東亞研究会、一九二六、1頁。饒宗頤『敦煌書法叢刊』一八巻碑金(一)、一九八三、八一一四頁、
- (19) 摘稿「沙州圖經略考」『樓博士邊曆記念東洋史論叢』山川出版社、一九七五、五一頁以下。
- (20) P三七二〇背(1)、王重民「莫高窟記(敦煌史料之1)」歴史研究一九五四一一、同著『敦煌遺書論文集』中華書店、一九八四、三一一頁。
- (21) 謝稚柳「敦煌藝術叢錄」古典文学出版社、一九五七、四〇二頁。
- (22) 史岩「敦煌石室画像題識」(一九四五自序、一九四七常書鴻序)『美術叢書』第五集第七輯、藝文印書館、一九七五、九六一五頁。
- (23) 『新唐書』卷六七方鎮表四、河西節度使条、『資治通鑑』卷二四唐紀四十、代宗大曆元年夏五月条。
- (24) S五四三、唐大曆年代(C.七七二)燼煌縣差科簿稿第五〇行に馬仙岳(ニ巖)、ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支所蔵敦煌文書一三七九号に鄧仙巖の名が見える。

- (25) 『沙州圖經』卷三(アリ〇〇四)三四〇—三六五行、
張芝墨池条。
(26) P三七二一、S五六九三。陳祚龍「敦煌写本『瓜沙古事繁年並序』」*纂正大陸雜誌*一一一二、一九六〇。榮新江「《瓜沙古事繁年》及其成書年代」『敦煌吐魯番文獻研究論集』一、一九八三、六六〇—七〇頁。
- (27) 潘玉閃・蔡偉堂「敦煌莫高窟第一三〇窟窟前遺址発掘報告」敦煌研究第一期、敦煌文物研究所、一九八一年、一二六頁。
- (28) 藤枝晃「敦煌千佛洞の中興」東方學報三五、一九六四。張氏諸窟を中心とした九世紀の仏窟造営という副題をもつこの労作は、文献と造形を総合的に追求する莫高窟研究に一時期を画す貢献を齎した。この機会に同論文七八一八〇頁に載せる張淮深造窟記韓本について、近年利用できるようになつたマイクロ焼付により錄文を補訂し、利用者の参照に資する。1行□→再、2行之□→共奏、3行言忍→五稔、5行□→萬、9行到→劫、10行敵→歟、14行膳→膳、16行若→宏、□→選擇、19行臂→舒、23行蘊→薦、24行稜→積疊、25行□→於東□、□→島於東終、截断、墻→堵、26行和→扣、□→鋼、宇→竽、27行拔→状、28行標→換、31行□→初、32行□→歩、33行拝□→塑裝、捨→擴、□→□□→體、掛□、38行聖跡→聖、39行金→舍、40行□→蒼、43行之□、…→梵釋之天、來供妙果、塞→塞々、44行□→滿、45行路→騎、□□□
- (29) 賀世哲・孫修身「瓜沙曹氏與敦煌莫高窟」『敦煌研究文集』甘肅人民出版社、一九八二、二二〇—二七二頁。
- (30) 史金波・白濱「莫高窟榆林窟西夏文題記研究」考古學報一九八二—II。
- (31) 劉玉權「敦煌莫高窟、安西榆林窟西夏洞窟分期」『敦煌研究文集』二七三—一八頁。
- (32) 馬世長「關於敦煌藏經洞的幾個問題」文物一九七八一二、二〇一三三、二〇〇頁。
- (33) 閻文儒「莫高窟的創建与藏經洞的開鑿及其封閉」文物一九八〇一六、六一—二頁。藤枝晃、*Reconstruction de la Bibliothèque de Touen-Houang*. JA CCLXIX, 1981, p. 65—68. 「敦煌藏經洞是何時封閉的」光明日報一九八四年十二月十六日2頁。
- (34) 王重民「敦煌本曆日之研究」東方雜誌三四一九、一九三七。藤枝晃「敦煌曆日譜」東方學報四五、一九七三。
- (35) 曹全碑は西安碑林にあり、『金石萃編』卷一八以下著錄文献は多い。
- (36) 「史通」卷一八別伝に「羣落たる英才、粲然として驕に盈つ」と叙述する。
- (37) 土肥義和「帰義軍(唐後期・五代・宋初)時代」『講座敦煌2敦煌の歴史』二五三—一八頁。
- (38) 莫高窟造窟者に関する論考は土肥義和、同(37)論考二)七七
- 絲寶貨、46行□→假、度→慶、…→福已報、47行縁→絲、事→司、48行…→柔容美德。
- (39) 姜伯勤「敦煌的“画行”与“画院”」『敦煌吐魯番學論文集』(甲刷中)。
- (40) Mission Paul Pelliot; *Documents archéologiques conservés au Musée Guimet, Touen-Houang*, t. XIV—XV, *Banvières et Peintures, catalogue descriptif et Planches*, 1974, 1976. なお一連の XII(卷)及び图像学的研究) XVI(鉛文や色紙類題記)二冊が続刊予定。
- (41) British Museum 脇惣、Roderic Whitfield 編集解説、上野アキズ『西域美術大英博物館スタイル・コレクション』敦煌絵画I・II、講談社、一九八二。第三巻統刊予定。
- (42) 創刊号(総第三期)の主要目次を参考にあげると、略論莫高窟第二四九窟壁画内容和藝術 段文傑 中晚唐的石窟藝術 閻文儒 莫高窟隋代圖案初探 孫修身 敦煌の歴史的背景
- 莫高窟第二九〇窟的仏伝故事画 キシリル第一一〇窟的仏伝壁画
莫高窟附近的兩座宋塔 《涼州御山石仏瑞像因縁記》考叡 孫修身 党寿 東千仏洞調查簡記
河西節度使覆滅的前夕 吐蕃王朝管轄沙州前後 本所蔵△酒帳△研究
本所蔵△酒帳△研究
积 “耶沒忽”
本所蔵△文選・運命論△殘卷介紹
《方角書一首》試析
《敦煌廿咏》寫作年代初探
莫高窟壁画、彩塑無機顏料的X射線剖析報告
敦煌学与西域文明文献研究目録△ 徐位業・周国信・李雲鶴
バーミヤン石窟 樋口隆康(劉永增訳)
(43) 本誌は蘭州大学内に編集部があり一九八一年から季刊で刊行され、二年間試刊をへて一九八三年第一期(総八期)から公刊となつた。
(44) 中国中亞文化研究協会編(主編馬雍氏)で一九八三年十二月第一輯が中華書局から刊行された。
- (45) 「月刊シルクロード」は一九七五年九月創刊、七卷二号(通卷五六号)(一九八一年一月)で停刊。「ユーラシア」は一九七一年創刊、七三年九号で停刊、同新一号

- (一九八一年一月) 二号(一九八五年一月) 休刊。「新刊東西交渉」(井草出版)は一九八一年三月創刊、本年三月に四巻一冊(通巻一)がドトロード刊中。
- (46) *Journal Asiatique*. T. CCLXIX, Numéro Spécial, 1979). *Manuscrits et inscriptions de Haute Asie du Vie au XIe siècle*, 1981, 406 pp.
- (47) *Les peintures murales et les manuscrits de Dunhuang. Colloque franco-chinois organisé par la Fondation Singer-Polignac à Paris, 21-23 février 1983*, Editions de la Fondation Singer-Polignac, Paris, 1984, 152 pp. その目次を記す。
- 序説 ハーティアンス・ウォルフ、ロルフ・A・スタイン
チベット写本における近年の諸発見
敦煌壁画の撮影
敦煌写本の壁画銘記
印沙仏と千仏擦印
敦煌における雛(ヌニヤニコ)の諸相
ダニエル・ヒリアズベルク
- 敦煌文献研究のための方法的基礎
- (48) 「敦煌研究一九八三年全国敦煌學術討論会特刊」一九八四年五月、二五頁。会議の写真一〇頁と特約評論員による「承前啓後 繼往开来」(会議の概要)一九頁及び一五篇の論文目録を含む。
- (49) *Proceedings of the thirty-first International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa*. Tokyo-Kyoto 31 August-7 September 1983, 2 Vols. Tokyo 1984, vol. II, pp. 973-1002, Seminar A-IV, Tun-Huang and Turfan Studies.
- (50) 『敦煌研究文集』甘肅人民出版社、一九八一。本書について筆者の簡単な紹介(新刊東西交渉一一四、一九八
- 11、三二一回頁)参照。
- (51) 北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』中華書房、一九八二、六八六頁。その目次を大略示すと、
- | | | |
|-------------------------------|---------|---------|
| 敦煌写本跋文(四篇) | 王重民遺稿 | 薄小瑩・馬小紅 |
| 敦煌文書学(漢文篇)発凡 | 左景權 | 盧向 |
| 敦煌写本書儀考(之一) | 周一良 | 蔡治淮 |
| 唐天宝敦煌差科簿研究 | 王永興 | 季羨林 |
| 吐蕃飛鳥使与吐蕃駕伝制度 | 張廣達 | 姜亮夫 |
| 關於唐末宋初于闐國的国号、年号及其王家世系問題 | 張廣達・朱新江 | 王重民遺稿 |
| 敦煌写本常何墓碑校訛 | 鄭必俊 | 季羨林 |
| 唐永泰元年—大曆元年河西巡撫使判集(伯二九四二)研究 | 安家瑤 | 王仲聰 |
| 敦煌県博物館藏地志殘卷—敦博第五八号卷子研究之一 | 馬世長 | 唐耕耦 |
| 地志中的「本」和唐代公解本錢一同右一 | 馬世長 | 王永興 |
| 敦煌写本諷諫今上破鮮干叔明令狐峘等請試僧尼及不許交易書考訛 | 陳英英 | 姜伯勤 |
| 敦煌吐魯番發現唐写本律及律疏殘卷研究 | 劉俊文 | 盧向 |
| 為肅州刺史劉臣壁等書(伯二五五五)校訛 | | 安家瑤 |
| 敦煌吐魯番發現唐写本律及律疏殘卷研究 | 劉俊文 | 祝總斌 |
| 吐魯番出土氾德達告身校訛 | | 王永興・李志生 |
| 吐魯番出土的兩份唐代法制文書略観 | 鄧小楠 | 許福謙 |
- 唐開元廿四年岐州郿縣縣尉判集(伯一九七九号)研究
敦煌写本唐僖宗中和五年三月車駕還京師大赦詔校訛
伯希和三七一四号背面伝馬坊文書研究
『同書』第二輯、北京大学出版社、一九八三年、六七四頁、その目次の大略は、
記敦煌写本的仏經
敦煌學之文書研究
新博本吐火羅語A(焉耆語)《弥勒金見記劇本》四頁
《新集天下姓望氏族譜》考訛
記吐魯番出土急就篇注
法國所藏敦煌漢文文書新目錄例
敦煌四件唐写本姓望氏族譜(?)残卷研究
試論勾官—唐代官制研究之一
上海藏本敦煌所出河西支度管田使文書研究
馬社研究—伯三八九九号背面馬社文書介紹
莫高窟壁畫上の玻璃器皿
高昌官府文書雜考
吐魯番出土氾德達告身校訛
吐魯番發現唐写本律疏殘卷研究
吐魯番出土的兩份唐代法制文書略観

- | | | |
|--|---|---|
| (52) 武漢大学歴史系魏晋南北朝隋唐史研究室編著『敦煌吐魯番文書初探』武漢大学出版社、一九八三。本書は十七篇のすぐれた論文を収めるが殆んど吐魯番文書研究に關わり、敦煌研究は朱雷「敦煌所出『唐沙州某市時值等口馬行時沽』考」と陳國燦「唐代的民間借貸—吐魯番敦煌等地所出唐代借貸契券初探」の両篇にとどまる。 | 敦煌遺書論文集序
《大正新修大藏經》第八十五卷—旧刊新評—《熾煌文書学発凡》之一章
敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (53) 絲綢之路考察隊編著『絲路訪古』甘肅人民出版社、一九八三、三二三頁。主要目次は
絲綢之路—中外人民友誼和文化交流的歷史見証（代序）
兩漢魏晉南北朝時期的敦煌
古代河西的興衰
從居延漢簡看內蒙額濟納旗的古代社會經濟狀況
河西的犁 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (54) Contributions aux études sur <i>Touen-Houang</i> . Librairie Droz, 1979, 167 pp. Pl. XXXVI. Nouvelles contributions aux études de Touen-Houang. Librairie Droz, 1981, 329 pp. Pl. XLIV. 後者の目次を大略訳出すると
八〇世紀の敦煌
仏説東流伝の古本
仏説生経断巻（P.一九六三）
劉薩詞と莫高窟
敦煌龍興寺資財錄（P.三三四三）研究
侯錦郎
壁画銘記集（P.三三〇四背）
ミシェル・スロミエ
左景權
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (55) L.I. Чучевский; Китайские Документы из Дунхуана, вып I, 1983, Москва. Издательство "Наука". 560 стр. 本書はソ連科学アカデミー東洋研究所ニンゲニアード支所蔵敦煌漢文写本（少數の吐魯番写本等を含む）中、社会経済関係文書類を集録、図版・録文・露訳・注解・解説を含む全四冊シリーズの第一巻で、籍帳・土地文書・寺院経済文書等を含む。 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (56) 大淵忍朗『敦煌道經 目録編 図録編』二冊、福武書社、一九八三。既刊十五冊、全体の構成は拓本・韻書・経史〔一～四〕・書儀・牒狀〔一～〕・詩詞・変文・碑金〔一～〕・写経〔一～〕・道書〔一～〕となつており、約一五〇点 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (57) 周祖謨『唐五代韻書集成』上・下二冊、中華書局、一九八三。一〇二二頁、附表二三頁。 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |
| (58) 饒宗頤編集解説『敦煌書法叢刊』全二九冊予定、二玄社、一九八三。既刊十五冊、全体の構成は拓本・韻書・経史〔一～四〕・書儀・牒狀〔一～〕・詩詞・変文・碑金〔一～〕・写経〔一～〕・道書〔一～〕となつており、約一五〇点 | 敦煌卷子札記四則
說鑑石—吐魯番文書札記 | 齊東方
周良
左景權
饒宗頤
宋新江
孫浮生
胡守為
楊檀
孫偉州
周偉州
梁福亞
胡載 |

を裏載。解説は林宏作氏により和訳せられてる。

- (53) 黄永武編『敦煌宝藏』新文豐出版公司、一九八一、全一五〇冊の予定で既刊一〇〇冊、ロハツ・北京本部分完成。

- (54) Tunhuang and Turfan documents concerning social and economic history. I Legal Texts. (A) Introduction & Texts. (B) Plates. Toyo Bunko, 1978, 80. 128 pp. Pl. 106 pp. 本書は山本達郎・岡野誠嗣氏と筆者との共編、日本は籍載内容とし山本達郎・土肥義和両氏共編で丘刷中、田は券契を対象に山本氏と筆者が編集中。

- (55) 誌(51)論集所収左景権氏の文もそれを意図した一例やあるが、他に蘇鑒輝『増訂再版敦煌学概要』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八一、四二七頁、陳祚龍『敦煌學要籍』新文豐出版公司、一九八二、藤枝晃『敦煌學導論』(南開大学歴史系講稿)一九八一、九二頁附錄八頁等がある。

- (56) 代表的著作ルノレ Paul Demiéville; *L'œuvre de Wang le zélateur servie des Instructions données de l'aïeul, Poèmes populaires des T'ang* (VIII-X^e siècle). Collège de France, Institut des Hautes Études Chinoises, 1982, 887 pp. が著かれてる。張錫厚『王梵志詩校釋』中華書局、一九八三、三八二頁と併せて敦煌通俗文学に対する東西研究者の関心と研究の現状の一端をうかがうことができる。文学方面は特に研究が密集しており、潘重規氏の『敦煌变文集新書』上、下二冊、康橋出版事業公司、一九八四や、川口久雄編集解説『敦煌資料と日本文学』一一四(破麿變・四獸因縁、敦煌壁画絵解き銘文集、大目乾連冥間救母变文、于闐国和尚阿弥陀經譯經文)大東文化大学東洋研究所、一九八三一四をはじめ数多く枚挙にたえない。

- (57) 陳寅恪「敦煌劫余錄序」陳垣編『敦煌劫余錄』一九三〇卷首、又中央研究院歴史語言研究所集刊一一一收。

- (58) 閻文儒〈莫高窟行〉中の句。收于「閻文儒伝記」『中

国近代社会科学家』第六輯、書田文獻出版社、一九八四、九二頁。

- (59) Catalogue des manuscrits chinois de Touen-Houang, III, Nos. 3001-3500. Edition de la Fondation Singer-Polignac, 1983, 482 pp. 本冊の第1冊はハヤシタク・ヒトネ、張其昌氏の共編で100-1100冊を収めた。第1-4冊は丘刷乃至編集中。

- (60) 代表的著作ルノレ Paul Demiéville; *L'œuvre de Wang le zélateur servie des Instructions données de l'aïeul, Poèmes populaires des T'ang* (VIII-X^e siècle). Collège de France, Institut des Hautes Études Chinoises, 1982, 887 pp. が著かれてる。張錫厚『王梵志詩校釋』中華書局、一九八三、三八二頁と併せて敦煌通俗文学に対する東西研究者の関心と研究の現状の一端をうかがうことができる。文学方面は特に研究が密集しており、潘重規氏の『敦煌变文集新書』上、下二冊、康橋出版事業公司、一九八四や、川口久雄編集解説『敦煌資料と日本文学』一一四(破麿變・四獸因縁、敦煌壁画絵解き銘文集、大目乾連冥間救母变文、于闐国和尚阿弥陀經譯經文)大東文化大学東洋研究所、一九八三一四をはじめ数多く枚挙にたえない。

(じけだ おん・東京大学教授)